

編集室紀行 看護学生としていま 「感じることを舞台に 徳島県立富岡東高校 羽ノ浦校作品『ロープ』上演

その舞台には看護学生たちがいた。演劇部の稽古そっちのけで、実技テストに向けて駆血帯で一人を縛りまくったりして、よく言えば自由、悪く言えばダラダラな日常が展開される。が、時が流れるうちに、学生たちは一人また一人と“現地”に出かけていき……。

2月8日、四国学院大学にて開催された四国高校演劇サミット2015で、高校生であり看護学生である徳島県立富岡東高校羽ノ浦校演劇部による『ロープ』が上演された。昨年11月24日に徳島県高等学校演劇研究大会に続き2度目の上演である。

以前は看護専門学校でもクラブ(サークル)活動が盛んなところはあったが、過密なカリキュラムで余裕がないことから、現在はあまり目立たない。そんななか、高校である羽ノ浦校では、県外で上演を試みるほど精力的に活動している。

「演劇部は5年前に、当時の顧問の先生がつくったもので、それまで私自身、演劇をやろうとは考えていませんでした」と、上演時3年生で部長であった橋本飛香さんは言う。「なので、特に“看護学生”であることを意識した作品もやってきませんでしたし、特にそれに疑問をもつこ

ともなかったんです。だから、今回の話を聞いたときは、ちょっとびっくりしました」。

『ロープ』の脚本を書いたのは、上演時2年生の倉田紗希さん。「脚本は2作目なんですけど、私も特に“看護”を意識して書いたわけではないんです。実は、もともと違う話を書いていたんですが、人がどんどんいなくなるという夢を見て、今回の話を思いつきました。考えてみると、それまで社会の授業を聞いたりニュースを見たりして感じていたことが頭のなかに残っていて、それで『ロープ』が生まれたんだと思います」。

今までやったことのなかった題材に当初は戸惑った部長の橋本さんだが、それでも制作に踏み切ったのは、生徒創作をやったことがない部の歴史のなかで、倉田さんが書いてきたというそのモチベーションを大事にしたかったから、という理由もあった。

演劇部顧問で、地歴公民科教員である吉川弥生先生は言う。「高校生であり看護学生である彼女らは勉強することがとても多い。けれども、人と接する職業に就く彼女らに、社会について関心をもってもらいたいと思って、授業をしています。ただ、演劇に関しては素人なので、ものづくりに対する姿勢や、いちばん近い観客としての気持ちを伝えることにしています。今回の作品では、演習用の器具なども使うので、看護の先生にも協力を仰いで、意見を伺ったりしました」。

倉田さんは、“看護”を意識して書いたわけではないと言っていたものの、今の社会を見ると、看護学生である自分たちに、そのうちこんなことが起こるんじゃないかという不安は、どこかで感じ

ていたと振り返る。その漠然とした不安を具現化したことが、この作品の質を高めたのではないかと、上演を見て思った。

進級して専攻科に上がる橋本さんに、演劇はロールプレイなどをよく行う看護に親和性がありますよね、と聞いてみると、「考えたこともなかった……。けど、たぶんその通りです。演劇経験は、きっとこれからの2年やその先に役に立つとは思いますが」と答えてくれた。

大会で上演できるだけの作品をクラブ活動でつくるといえるのは、忙しい看護学生にはなかなか難しいかもしれない。けれども、看護学生にしかできないものを発表する機会というのは、どの学校でも大事にしてもらいたいと思う。そして、看護の先生方も、専門を離れて協力する機会を増やしてもらいたいと願っている。(本誌編集室)

【あらすじ】

私たちは看護学生。倉庫を間借りして活動をしている演劇部は、県大会目前のある日、先輩が臨地実習でいないのをいいことに何だかダラダラ。部活動なんかより、明日の実技テストの練習がしたいと言い出し、私は何だかイライラ。みんな、勉強や生活にいっぱいいっぱい口喧嘩が始まったりしてしまう。

やがて時が経つにつれ、部員は減り、県大会で使うK-POPは禁止され、先輩は現地実習に行ってしまった。

でも、私たちはまだ行きたくない。ここにいたい。大人は止めてもくれないけど、状況を変えたいと何度も同じことを繰り返し、もがけばもがくほど、この世界はねじれていく。少しずついい方向に向かっているはずなのに……。



冒頭の一場面